

した。

苦しい冬がすぎ、春になったある日、千代子たちと滝尻原たきじりはらに出かけました。そこはなだらかな原っぱで、浅間山の白い煙がたなびき、レンゲツツジが、じゅうたんをしきつめたように広がっていました。足もとには、スズランの白い花がが咲ききみだれていました。

「いいかおりね。」みんなそのかおりにうっとりしながらも

「ここに、ライかん者のいこいの村ができたらね。かん者は心だけでも自由になれるでしょう。」と考えていたのです。

ケサの仕事は、さらに多くなり、休むひまありませんでした。心ぞうの弱いケサは、ついにぜんそく発作ほっさのためたおれてしまいました。そのうえ、妹のテイや両親がなくなり、悲しみでいつぱいでした。けれど、「わたしをたよっているかん者がいる。」といって、休もうとはしませんでした。さらに、どうしてもライかん者の村を作りたいという夢を実現させたかったです。だから、馬のゆれにた